

# 文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥

藤田湘子

そんなことはないだろう、今も延々と修羅の中から文学は生み出されている。と思いつつも、共感した。

湘子七十九歳、死の直前の作である。自身の心身の体力が無意識のうちに「修羅」を遠去けていたのかもしれない。しかし、普段からそのことに心を留めていないと、その感慨は、ある日突然やって来るものではない。心にたまる澱のように蓄積されたのではないだろうか。

奇しくも、最期の編集後記は、「最近俳壇をずーっと見渡して切実に思うことは、『俳句の骨が無くなっちゃった』である。」という書き出しで始まっている。

「みやこ鳥」といえば、伊勢物語や、富安風生の「昔男ありけりわれ等都鳥」の句などを思い出す。

2005年 (h17作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京